

『新バシレイオス伝』の世界観

——聖人伝に見るビザンツ世界——

土居 英樹

大阪市立大学文学部世界史学教室

1. はじめに

ビザンツ帝国では、初期キリスト教時代から古代末期の間に多くの聖人伝が作られた。そして、イコノクラスム後の修道生活の活性化を契機として、特に9世紀から12世紀の間、過去の聖人伝をメタフラスシしたものや新しい聖人伝が作られ続けた¹。その豊富さは、8世紀から10世紀までの聖人伝データベースであるDOHDに収められているものだけでもその数が百を越えることから分かる²。ビザンツ学においてこのように大量に存在する聖人伝を使った研究はもはや一般的なものであると言えるが³、改めて聖人伝を個別に分析し、その性質を見極めることは、それらの置かれた歴史的文脈や社会・文化の研究における聖人伝利用の射程を再考することに繋がる点で、現在でも意義があると思われる。

本稿で扱う『新バシレイオス伝』(Βίος καὶ πολιτεία καὶ μερική θανμάτων διήγησις τοῦ ἐν ἁγίοις πατρὸς ἡμῶν Βασιλείου τοῦ Νέου: BHG 263-264)は、10世紀中頃にコンスタンティノーブルで作られた聖人伝であり⁴、コンスタンティノーブルを舞台として聖人バシレイオスの奇蹟と彼のもとに集まってくる一般教徒たちを描写する「伝記」の部と、死後の魂が通る関所や天上のイェルサレム(天国)、最後の審判の幻視などの「異界探訪譚」の部を含んでいる。10世紀ビザンツ世界は終末意識の高まりによって特徴づけられ、『新バシレイオス伝』はそのような社会的背景を伝えてくれる史料である。この聖人伝の校訂や年代、間テキストなどを扱った先行研究で代表的なものとしては、クリスティーナ・アングリディの博士論文や⁵、レナート・ライデンの文献学的研究などが挙げられる⁶。『新バ

シレイオス伝』は、帝国の正式な聖人伝集成である『メノロギオン』や『コンスタンティノーブルのシナクサリオン』に含まれなかったにもかかわらず現在まで多くの写本が残っていることから、アンゲリディは10世紀ビザンツ社会に対する民衆の認識や宗教観が反映された史料と評価しており⁷、筆者もこの認識に立っている。その後、「伝記」部分の研究についてローズマリー・モリスが聖人の社会的機能の研究の文脈で取り上げ⁸、ポール・マグダリーノがその有用性の議論を行っている⁹。他にセルゲイ・イワノフが「聖愚者」研究の中の一事例として聖人バシレイオスを扱っており¹⁰、伝記中で聖人のもとに集う奴隷の描写も断続的に研究されている¹¹。一方、「異界探訪譚」の部分については、複数の研究者が天国の表象にコンスタンティノーブルが反映されていることを指摘しており¹²、さらに早川美晶が関所イメージの受容の変遷を解明している¹³。また、アンドレイ・ティモティンが幻視研究の文脈で一事例としてこの聖人伝を取り上げており¹⁴、ジェーン・バーンによる異界の体系的研究でも利用されている¹⁵。なお、以上は主にギリシア語版を対象としており、スラヴ語版はイリアス・エヴァンゲルウがブルガリア文学史の文脈で分析している¹⁶。近年ではアリス＝メアリー・タルボットらが新しい校訂・翻訳を出し、以上で挙げた研究も紹介している。このように、研究が比較的進められてきたと言えるが、個々の要素を一部利用した研究が大半で、聖人伝全体を総合的に分析したものはアンゲリディの研究のみである。それも四十年以上前であることを鑑みれば、その間に蓄積された研究をふまえた検討が必要であると考えられる。さらに、先行研究の多くが聖人伝の特殊性を指摘しているが、実際に他の聖人伝との比較を本格的に行ったものはほぼ見られない¹⁷。このような状況をふまえ、蓄積されてきた個別研究を可能な限り総合しつつ、トポスによる聖人伝の通時的・同時代的な比較の視座を導入することで、『新バシレイオス伝』の特徴がより明確に捉えられるだろう。

最後に本稿の構成について述べる。第二章では、エルンスト・ローベルト・クルツィウスの古典的研究やトーマス・プラッチの事典的研究を起点にビザンツ聖人伝におけるトポスの意味と機能を明らかにし、中期ビザンツまでの聖人伝のトポスを時系列で概観する。第三章では、『新バシレイオス伝』の物語のあらすじと手稿本の特徴、オリジナル版の成立年代、内容の特徴を見ていく。第四章では、この聖人伝の置かれた歴史的な文脈を参照したうえで、トポスから逸脱した特徴を分析する。最後に、第五章では同時代・後世の聴衆による受容の在り方について論じ、結論において第四章と第五章で明らかになった性質をもとに『新バシレイオス伝』をビザンツ文学史¹⁸の中に位置づける。

2. ビザンツ聖人伝における「トポス」

2-1. トポスとは何か

近年、ビザンツ学の分野において聖人伝や詩、書簡など文学的史料に焦点を当てた研究が盛んである¹⁹。その中で、ビザンツ学においても使われる「トポス」という文学上の用語が存在する。トポスとは元々ギリシア語で「場所」を意味する。しかし、クルツィウスによれば、文学研究においてトポスとはあらゆる作品を執筆する際の「貯蔵庫」的役割を果たし、古代の文学やそれを継承した後世の文学において常に存在するモチーフとされ²⁰、現在もトポスはこの意味で定着している。聖人伝のトポスを事典的に収集して類型化したブラッチによれば、クルツィウスの「トポス」はビザンツ聖人伝や他の文学形式にも適用できる上に、ほぼこの意味で用いられる。すなわち、「聖人伝トポス」とはある程度固定された文学的モチーフであり、その形態を少しずつ変化させながら広く適用され、伝承されてきた。そのようなトポスには、二つの機能が存在するという。

一つ目の機能は作り手が聖人伝を作成する時、既に存在するトポスの中からその目的に合うように取捨選択することで、一定の形式を保つという機能であるという。例えば、前文で伝記の意義を述べた後、最初に聖人の出自を述べ、次に世俗における生活の中で真理を悟る場面、最後に修道士になって死ぬまで修行する場面を描くといった構成は、それぞれの場面が聖人伝によく見られるトポスであるといえよう。ゆえに、聖人が実在しなくとも、これらトポスを継ぎ合わせれば、架空の聖人伝を作ることが可能ということになる²¹。また、ライデンが指摘しているように著者が捏造したと疑われる聖人伝は多く存在する。その事例として、初期ビザンツの『ガザのポルフィリオス伝』、『ヒュパティオス伝』、『エピファニオス伝』、9世紀の『エデッサのテオドロス伝』、10世紀の『聖愚者アンドレアス伝』や『ニフォン伝』などが挙げられ、これらの多くが同時代に見られるトポスを利用して作られているという²²。

二つ目の機能は、トポスによって読み上げられている物語が聖人伝であると聴衆に認識させるという機能であるという。すなわち、前述のようなトポスが連続して作品内に配置される場合、いくつか含まれる場合のどちらにせよ、聴衆は無意識に読み上げられるそれを「聖人伝」として認識したのである²³。当然のことながら、以上で述べてきたようなトポスとは、常に後世の人間からの視座であり、豊富な前例の蓄積があるような環境を前提とした概念であるという点に

注意しなければならない。

2-2. 聖人伝トボスの概観

プラッチによれば、本稿が特に注目する中期ビザンツの聖人伝は、概ね「聖人の伝記」という根本的な枠組み自体は保つという統一性と、その中でそれぞれに独自性を有するという多様性を併せ持つという²⁴。しかし、一定の傾向自体は存在することを鑑みれば、ここで全てを詳細に検討することは困難であるが、時代ごとの聖人伝の特徴をトボスという大きな傾向として類型化することは可能であると考ええる。以下では、プラッチの研究を起点に、他の聖人伝研究の成果を加味しつつ、ビザンツ世界におけるギリシア語聖人伝のトボスの概観を試みる。

まず、古典的なものとしては、『アントニオス伝』や『エジプトのマリア伝』のような初期キリスト教時代の聖人伝において描かれる砂漠や荒野で禁欲することで聖性を獲得した「砂漠の隠者」の事績、『ポリュカルボス伝』や『エウフェミア伝』、『ゲオルギオス伝』のようなキリスト教迫害に抗した「殉教者」の事績などが挙げられるだろう。また、『柱頭行者シメオン伝』に代表されるように、都市の近くの柱の上で修行する「柱頭行者」の伝記も盛んに作られた。

9世紀以降になるとイコン崇敬の復活によって、イコノクラスムに抵抗したことから社会的地位が上昇した「修道聖人」が増加していった。その中で誘惑の象徴である都市空間に居住する「都市聖人」も多く現れた。例えば、ストゥディオス修道院のように、都市の中に修道院共同体が数多く創設され、修道院出身の聖人が増加したのである²⁵。なぜなら、修道院創始者や修道士を聖人として伝記に描くことは、修道院の維持や名声の確立に直結するからである。ストゥディオスのテオドロスの母と叔父のように聖人の親族も聖なる存在として描かれることも増えた。ゆえに、彼らの聖性の根拠は規律を厳密に守って修行に励んだからというより、民衆から広く崇敬を集めたことや親族や修道院などの身内ぐるみで崇敬を促進したことなどが理由で聖人崇敬されたという場合の方が多かった²⁶。実際、9-10世紀の聖人伝の著者のほとんどが修道士や教会人である²⁷。

そして10世紀以降、『ミカエル・マレイノス伝』、『アトスのアタナシオス伝』、『新神学者シメオン伝』のような富豪の出身、あるいは名家の出身とされる「高貴な聖人」が増加する。それに伴って聖人自身が学問を修めていたり、以前軍隊や教会に務めていたりした場合も増える。そのような恵まれた環境から距離を置いて修道士となって聖性を獲得するというトボスが存在したと言える²⁸。

また、10世紀から11世紀には各地域、各修道院を「旅する聖人」が多く存在

していた。すなわち、特定の教会や修道院に所属せず、説教・予言・治癒によって共同体に靈的指導を施した聖人が南イタリア、ギリシア、クレタ島を中心に存在したという。例えば、クレタ島とペロポネソス半島を旅したメタノエイテのニコン、イェルサレムへ旅したガレシオンのラザロスなどである²⁹。その要因は、聖人が各地域の共同体から見て「異人」であり³⁰、血縁関係やしがらみから解放されているため、共同体の仲介者として人気を集めたことにあるという³¹。また、アラブ人海賊、ブルガール、ルーシなどの侵略・略奪行為や地震など自然災害の際に各地で靈的救済や外部からの助けが求められたことも要因とされる。実際、聖人の予言によって侵略前に対策が可能になった事例が複数見られる。例えばモリスによれば、これは聖人の靈的父子関係のネットワークの中に軍人や宮廷人など帝国政府関係者がいるために、事前に情報を得ることができたという「早期警戒システム」が存在したとされる³²。中期ビザンツにおいて聖人とはあらゆる社会層の人々にとって最も頼りになる身近な存在であった。聖性の評判がある「聖人」の所に人々は治癒や助言、予言を求めて集まり、靈的父子関係を結ぶのである。修道士も一般教徒も聖人のもとで等しく皆が靈的兄弟となった³³。

中期ビザンツにおいて「修道聖人」や「都市聖人」、「高貴な聖人」、「旅する聖人」らの伝記が目立ってくる中、特に10世紀に「幻視譚」を伴った聖人伝や黙示録が多く登場した。すなわち、コンスタンティノープルを舞台として幻視を描いた聖人伝である『新バシレイオス伝』、『聖愚者アンドレアス伝』、『ニフォン伝』、『修道士コスマス伝』や³⁴、舞台は異なるが幻視譚を含む『グレゲンティオス伝』、純粋な幻視譚である『アナスタシアの幻視』などが挙げられる。第四章で詳述するが、この背景には終末論の流行があり、特に10世紀の首都で作られた聖人伝のトポスとは、幻視によって天国や地獄、最後の審判を描写することであった。また、コンスタンティノープルを舞台とする点、聖人との靈的父子関係が救いにおいて重要であると強調されている点も同様にトポスとして挙げられる。その中でも『新バシレイオス伝』は、際立った特徴を有する。すなわち、聖人伝にもかかわらず、内容の三分の二以上が聖人の事績ではなく、一般教徒が幻視した「異界の語り」で構成されている。これまで見てきた聖人伝、あるいは同時代の幻視譚を含む傾向にある聖人伝と比較しても、その異質さが際立っている。もはや聖人伝である意味が希薄という印象さえ受けるかもしれない。

以上、時系列で概観してきたように、トポスは時代・地域ごとに変化を見せる。第三章以降では、中期ビザンツの聖人伝の中でもトポスからの逸脱が著しいように思われる『新バシレイオス伝』を取り上げ、この聖人伝の性質や、当時どの

ような聴衆に向けられ、どのような効果を及ぼしたのかを明らかにしていく。

3. 『新バシレイオス伝』の概要

『新バシレイオス伝』は、バシレイオスの首都来訪、女奴隷テオドラの死後の関所通過、バシレイオスの事績、聖人伝の著者グレゴリオスによる天上のイェルサレムの幻視、続いて最後の審判の幻視、バシレイオスの死と埋葬の六つの章に分けられる。第三章では、物語の各章の内容について概説し、聖人伝のもつ特徴について論じた後、手稿本の情報、オリジナル版の作成年代、成立背景を巡る議論などについて確認していく。

3-1. 聖人伝の内容と特徴

第Ⅰ章において、小アジアの荒野を放浪していた聖人バシレイオスは帝国官憲にスパイの容疑をかけられてコンスタンティノーブルへ連行される。聖人は沈黙を守って身元を明かさず、宮廷高官のアラブ人サモナス³⁵によって尋問・拷問された後、海に投げ込まれる。二匹のイルカに救助されたバシレイオスは、都の黄金門に辿り着いた時に悪寒に苦しむ男を治癒したことから、その男と妻が住む私邸に居候し、訪問者に助言や奇蹟を行うようになった。そこでは、聖人の評判を聞いて来たロマノス・サロニテス³⁶、皇帝ロマノス1世レカペノスや皇后ヘレナなどのエリート層との交流、著者グレゴリオスとの出会いが描かれる。また、聖人の事績を述べてコンスタンティノス・ドゥーカス³⁷の反乱という歴史的事件も描かれる。居候していた私邸の夫婦の死後、聖人はそこに一人で住みながら、コンスタンティノス・バルバロス³⁸という裕福な男の私邸に通うことになる。

第Ⅱ章では、移り住んだバシレイオスの世話役となった女奴隷テオドラの死と、死後の関所通過を著者グレゴリオスが幻視するという話が語られる。東方キリスト教世界には、死後の魂が複数の関所で裁きを受けるという非公式の伝承がある。全関所を通過できた者は天国へ行き、途中で罪を咎められて指定の金銭を支払えなかった者は地獄へ落とされる。関所の数は二十一で、テオドラは途中で訴えられるが、同伴した天使の弁明や聖人の介入のおかげで天国まで辿り着くことができた。全人類を対象とした最後の審判、すなわち「公審判」の前に、このような個人を対象とした「私審判」を想定することで、終末までの死者の行方を説明したのである。この伝承は『新バシレイオス伝』に結実し、関所は数と罪の種類を変動させつつ現在の東方キリスト教世界でも受容されている³⁹。

第Ⅲ章では、バシレイオスのもとにやって来る市井の人々との交流が描かれ

る。首都エリートが数多く登場した第Ⅰ章とは異なり、貧民や奴隷、女性を中心とした人々が登場する。また、コンスタンティノス・バルバロスの縁者であり、高位の宦官であるゴンギュリオス兄弟⁴⁰の私邸にも頻繁に通うようになり、そこで訪問者たちの病を治癒したり、予言をしたり、事件を解決しながら物語は進行する。このように、一般教徒の私邸に住み、首都のあらゆる社会層と交流する点にも特徴がある。ここでも、聖人がその到来を予言する文脈でハンガリー人の侵略未遂や、ルーシのコンスタンティノーブル襲撃などの歴史的事件が描かれる。

第Ⅳ章では、バシレイオスの力によって著者グレゴリオスが目撃した麗な天上のイェルサレムの幻視が描かれる。第Ⅳ章と次の第Ⅴ章では著者グレゴリオスが主人公として、第Ⅱ章と同様に主に一人称視点で、幻視について語る。基本的には黙示録の伝統的表現をふまえているが、天上のイェルサレムの光景はコンスタンティノーブルの貴族の私邸や宮殿を模するという独自性を有する。

第Ⅴ章では、続いて最後の審判の幻視が描かれる。キリストの二度目の復活の後、審判が始まり、天国へ行く人々と地獄の炎に落とされる人々の姿が詳細に描かれる。特に、単性論者など異端とされた教会人、イコノクラスト、腐敗した聖職者や修道士、キリスト教徒を迫害したディオクレティアヌス帝、ユダヤ人などが地獄の炎に焼かれる描写、そしてハギア・ソフィア大聖堂を意識したと思われる神の大聖堂のエクフラシスが印象的である。キリストの再臨後の天使の歓呼や戴冠式の様子がコンスタンティノーブルにおけるそれと類似している。

第Ⅵ章では、聖人バシレイオスの最後の日々と死、その埋葬が描かれる。著者であり弟子でもあるグレゴリオスは、第Ⅳ章と第Ⅴ章で体験した幻視の詳細を忘れないうちに七日間で書き留めたと言う。彼は、聖人との最後の会話の後、四旬節の期間に隔離された場所で修行を行っており聖人の死と埋葬に立ち会えず、後にその事を知ったと語っている。聖人に私邸を提供していたコンスタンティノス・バルバロスによって埋葬の準備がなされ、その間に信者が聖人の衣服から布切れや毛を盗む。コンスタンティノスは聖人を首都の外側にある彼の所有地内のテオトコス教会に埋葬しようとするが、宦官ヨハネスが首都の内側に葬ることを強く主張する。結局バシレイオスの遺体は木製の棺に入れられて、首都北西部のカルトフィラクス女子修道院に埋葬された。こうして物語は幕を閉じる。

以上、聖人伝の内容を概観してきたが、三分の二が弟子であり著者でもあるグレゴリオスが異界の幻視を語る構成となっており相対的に聖人の事績が少ない。著者を中心に展開される物語は、聖人伝トボスから逸脱していると言える。都市に住む聖人というトボス自体は特殊ではないが、『新バシレイオス伝』は聖人の

在り方と同時に、他の観点からも異色である。すなわち、聖人伝とは本来、聖人の事績を語ることが主眼であるはずだが、この聖人伝では著者グレゴリオスの語りによって自身と聖人の密接な関係、テオドラの関所通過、天国、最後の審判の幻視を語ることが主眼であるように見える。さらに、聖人の力を借りているとはいえ、奇蹟的な幻視を見た著者自身の卓越性が結果として強調されている。また、歴史的イベント・人物を物語に登場させているが、その年代や事績の多くが歴史的事実と異なっており、聖人の事績の流れを切ってまでそのような話を挿入している理由は聴衆の気を引くためのように思える。

加えて、第Ⅰ章、第Ⅲ章において、聖人は修道士と推察されるにもかかわらず修道院ではなく信者の私邸で生活し、教会の典礼にさえ出席せず、公的共同体を意図的に避けている。グレゴリオスもまた修道士ではなく、首都郊外に小さな土地を持つ俗人であり、かつ独身である。これは修道院に入るか宦官にならない限り、親の紹介で結婚することが一般的なビザンツ社会では特に注目に値する⁴¹。また、多くの奴隷と宦官が物語の主要登場人物として登場することも特殊である。このように、『新バシレイオス伝』はトボスからの逸脱に特徴がある。

3-2. 手稿本の特徴

『新バシレイオス伝』の手稿本は13世紀から19世紀までの間に35本存在する⁴²。また、古代教会スラヴ語に翻訳された14世紀の手稿本も存在するため、コンスタンティノープルだけではなく他の地域においても受容されていたことが分かる⁴³。アンゲリディによれば、手稿本の内容から五つの代表的な型に分けられると言う。その中で、年代的に最も古いのは13世紀作成の聖人の事績以外を省略したアトス山イヴィロン修道院所蔵手稿本第478番(イヴィロン版)、フランス国立図書館所蔵手稿本第1547番(パリ版)である。しかし、ライデンの緻密なテキスト分析によって、16世紀作成の聖人の事績と異界探訪譚の両方を含むロシア国立歴史博物館所蔵手稿本シノド第249番(モスクワ版)が未発見の10世紀のオリジナル版を最も反映していると考えられている⁴⁴。また、このモスクワ版から分かる聖人伝の特徴は、377フォリオという異常とも言える物語の長さである。筆者もこれらの先行研究に従って、今回はモスクワ版の校訂本及び翻訳を使用することにする。

3-3. オリジナル版の作成年代

未発見の聖人伝のオリジナル版の作成年代については多くの研究者によって

議論されてきたが、現在でも最終的な結論が出ているわけではない。この聖人伝には歴史的事件・人物がたびたび登場する。物語はバシレイオス 1 世の死とその息子達の治世を簡潔に記した後、主要部分はロマノス 1 世レカペノス（在位 920-944 年）の治世期間を中心に展開される。また 913 年のコンスタンティノス・ドゥーカスの反乱や 941 年のルーシのコンスタンティノープル襲撃への言及、949 年のクレタ島遠征の指揮をしたコンスタンティノス・ゴンギュリオスなどが登場する。さらにロマノス 1 世の治世以後の出来事に聖人が関与しないことと、聖人が受胎告知の祝日の後、すなわち四旬節の最中である三月二十六日に亡くなったと記録されていることから、聖人の死亡年は 944 年から 952 年の間と考えられている⁴⁵。これらの事を考慮すると、聖人伝オリジナル版の執筆は 944 年あるいは 952 年以降ということとなる。正確な執筆年代に関しては多くの説が唱えられたが、それらを集約して考えると、最も原型を留めているモスクワ版の内容の大半は、950 年代から 960 年代の間に書かれたものであると言える⁴⁶。

3-4. 成立背景を巡る議論

「はじめに」でも述べたように『新バシレイオス伝』は、聖人と著者の実在性が疑われている。ここでは、その要因と議論を確認する。この聖人伝は、同時代に書かれた『聖愚者アンドレアス伝』と多くの類似要素を有している。以下ではその類似点について述べた後、そこから明らかになる問題について論じる。

『聖愚者アンドレアス伝』は、5 世紀のコンスタンティノープルを舞台としているがその描写から実際は 10 世紀に作られていることが判明しており、聖人も架空の人物であるとされている⁴⁷。その内容はコンスタンティノープルに奴隷として連行されたアンドレアスの事績や彼と貧民や娼婦などの市民との交流を描写している。主人のもとから逃亡して「聖愚者(σαλός)」⁴⁸として活動するようになったアンドレアスにはハギア・ソフィア大聖堂の聖職者を名乗る著者ニケフォロスとエピファニオスという弟子がいる。後者はグレゴリオスと同様に幻視の主体にもなっており、聖人と同程度に物語の中心的役割を担っている。また、アンドレアスの「聖愚者」としての性格だが、バシレイオスが物語の冒頭で一切身元を明かさないことを鑑みれば、一時的に「聖愚者」の性質を帯びていると捉えられ、類似点の一つに数えられる。さらに、両聖人伝は、帝国の正式な聖人伝集成に含まれていない。またバシレイオスは公の教会や修道院に批判的で、距離を置いており、アンドレアスは市街を放浪して狂人を装い聖性を秘匿しているが、聖愚者は 5 世紀に隆盛した聖人の形態であり、後世では、悪魔の誘惑にさら

され、異端と見なされる危険があるとして教会や修道院からタブー視された⁴⁹。

以上の類似点をまとめる。両聖人伝は作成年代が10世紀で、聖人のコンスタンティノープル市民との交流や事績を描写しており、皇帝や皇后、宮廷高官、宦官、奴隸、貧民、娼婦などあらゆる社会層が含まれる。そして聖人の前半生を知らない弟子の一人称視点で物語は進み、弟子による異界の幻視体験が伝記の途中で複数挟まれる。共に帝国の正式な聖人伝集成には含まれておらず、バシレイオスは教会や修道院から距離を取り、アンドレアスは当時推奨されなかった聖愚者であった。これらから両聖人伝が伝統から逸脱していることが読み取れる。

また、ポール・マグダリーノが指摘するように、両聖人伝は類似点が多い上に、含まれる情報が補完的である。すなわち、『新バシレイオス伝』では、主に宮廷人たちの私邸が描かれ、さらにその私邸が天国の幻視の光景のイメージ元となっているなど、煌びやかな上層社会の私的空間を中心としたコンスタンティノープルが舞台となる。登場する人物も主に貴族と呼べる裕福な人々やそれに仕える奴隸・使用人たちである。一方で、『聖愚者アンドレアス伝』では、聖人は「聖なる愚者」として貧民たちに混じって乞食をしたり、柱廊で雨風にさらされながら眠ったり、首都住民から頻繁に罵声を浴びせられて殴られたり、娼館で誘惑されたりする。同時に、広場や市場などの公的空間も描き出す。同じコンスタンティノープルが舞台にもかかわらず、その中で描かれているのは、首都に存在する公的空間と下層社会という別側面である。さらに、どちらも最後の審判の描写を含むが、前者がキリストの二度目の復活からその描写を開始しているのに対し、後者は復活の前に詳細な地獄の紹介も含めており前者を補完している⁵⁰。

このように、多くの類似点に加えて、全体として相互補完的な内容を持っていることは両聖人伝が同じ環境で作られた、あるいは同じ著者によって作られたことを示唆していると言える。そして、形式・内容面における逸脱的特徴とアンドレアスが架空の聖人であることから、バシレイオスもまた架空の聖人ではないかという議論が長い間なされてきたのである。

ただし、バシレイオスに関しては、ノヴゴロドのアントニオスという人物が1200年頃にコンスタンティノープルに巡礼し、聖人バシレイオスとその奇蹟を起こす聖遺物に対する崇敬を示していることが分かっていることが指摘されている。すなわち、聖人が実在した場合の死亡年から約二百年後にも聖人崇敬が存在したことになり、新しい校訂本の編者の一人であるタルボットは聖人の実在を主張している。また、聖人の教会・修道院に対して取っていた距離が理由となって公式の聖人伝集成から除外されただけだったかもしれないという可能性も

指摘している。ただし、巡礼者アントニオスは著者グレゴリオスではなく聖人バシレイオスが最後の審判の様子を描いたと誤解しており、伝記ではコンスタンティノーブル市内にあるカルトフィラクス女子修道院に置かれたはずの聖人の墓がクリュソポリスという別の場所にあるなど情報が矛盾しているという⁵¹。また聖人崇敬の存在と聖人自体の存在が直接結びつくとは限らない。それは、著者グレゴリオスについても同様だろう。ただし、それでも後世における崇敬の存在と聖遺物の存在は無視できない。ゆえに、聖人・著者・他の主要登場人物に関して、聖人伝の記述と一致はしないとしても、モデルとなった、あるいは類似した人物がいた可能性は高いと言える。首都住民との交流の描写の詳細さについて考慮すれば、著者自身が作中で描かれたような環境における実体験を反映している可能性も高い。いずれにせよ、先行研究においては、聖人と著者が実在したとしても、聖人伝におけるその描写は著者・パトロン・聴衆の世界観や願望に基づいて構築される「理想的な聖人像・著者像」であることが多くの聖人伝研究者たちによって指摘されてきた。これを考慮すれば、少なくともここで聖人バシレイオスと著者グレゴリオスの実在を巡る議論を決着させる必要はない⁵²。ゆえに、以下の議論において、バシレイオスとグレゴリオスについては聖人伝における彼らの描かれ方に注目して分析を進める。また、その際にグレゴリオスを実在した「著者そのもの」ではなく、聖人伝の中に登場する「語り手」として論じる。

4. 『新バシレイオス伝』にみるトボスからの逸脱

一般的に、聖人伝とは聖人の生涯と奇蹟を記録し、それを人々に読み聞かせることで教化したり、後世まで聖人への崇敬を残したりすることが目的である。にもかかわらず、第二章でも述べたように『新バシレイオス伝』は、聖人の事績よりも弟子の一人で、語り手でもあるグレゴリオスの体験と幻視の説明の方がその大半を占めている。さらに、テオドラという一介の女奴隷が関所通過の主人公として登場し、聖人の事績の中にも多くの奴隷や宦官が登場する。第四章では、このようなトボスからの逸脱的要素を、従来及び同時代の聖人伝トボスと比較検討した上で、この伝記が置かれた歴史的な文脈を確認しながら分析していく。

4.1. 終末意識の高まりという歴史的な文脈

まず、『新バシレイオス伝』が書かれた当時の歴史的な文脈について述べる。マクダリーノを始めとするビザンツ帝国における終末論の研究者たちによれば、この伝記が作られた10世紀コンスタンティノーブルでは終末論を伝えるテクス

トが流行しており、当時の人々の多くが世界創造暦 6500 年頃に世界終末と最後の審判が起ると認識していたと考えられている⁵³。ティモティンはビザンツ終末論に関する先行研究をまとめた上で、それまで余り扱われてこなかった幻視譚に焦点を当てて、9-10 世紀にかけて世界終末のイメージを流布させる機能を有していたのが死後の世界やそこで生じる最後の審判を描写する「幻視」であったと再評価した⁵⁴。もちろん、この時期以外にも、初期キリスト教の時代からビザンツ期・ポスト・ビザンツ期に至るまで幻視譚が多く存在する。具体的には『偽メトディオスの黙示録』、『修道士コスマス伝』、『アナスタシアの黙示録』、『マリアの黙示録』、『聖愚者アンドレアス伝』、『ニフォン伝』などである。また、これらの多くは、新約聖書に含まれる『ヨハネの黙示録』や外典とされる『パウロの黙示録』など初期の黙示録の伝統を受け継いでおり後世まで多くの手稿本が伝わっている。ここから言えることは、異界の幻視譚自体は特殊なものではなく、伝統的なトポスの一つであり、特に 10 世紀に幻視譚を含む聖人伝のトポスが出現したということである。ただし、ティモティンによれば、幻視譚それぞれの作成環境・聴衆に応じて異なった意図が存在するため、一概に終末論的描写をすることだけがその作成目的ではないことが分かっている⁵⁵。また、その中で『新バシレイオス伝』はこのような黙示録文学の一つとしても位置づけられると同時に、反ユダヤ的メッセージによっても特徴づけられるという。すなわち、ティモティンは 9-10 世紀のバシレイオス 1 世やレオン 6 世、ロマノス 1 世レカペノスなどマケドニア朝の皇帝たちによるユダヤ人の強制改宗政策と、特に『新バシレイオス伝』で強調される反ユダヤ的言説が軸を一にしており、後者が幻視を利用することで前者の正当化に貢献していたのではないかとしている⁵⁶。つまり、『新バシレイオス伝』は来るべき最後の審判の幻視を通して、世界終末に対する当時の人々の期待を反映していると共に、同時代のユダヤ人改宗政策という政治的イデオロギーを反映した文献の一つとしても位置づけられるという。通常、反ユダヤ的言説は対話形式の反駁書や聖人伝などにも含まれる説教の中で語られるが、この聖人伝はバシレイオスのグレゴリオスに対する説教だけではなく、実際に異界で生じる出来事を見せている。すなわち、ユダヤ人の後悔、神と予言者たちへの嘆願、そして地獄の炎に焼かれる嘆きを詳細に示すことで、「視覚的に」その正当性を主張しているという点で特殊である⁵⁷。以下で見ていく『新バシレイオス伝』の多様な特質を考慮すれば、このような反ユダヤ的描写は聖人伝作成の目的というより、10 世紀ビザンツの人々の終末意識の高まりという背景の中で顕著に現れた表象の一つと言えよう。

また、マグダリーノによれば、この聖人伝においてコンスタンティノーブルは、オイコス(oikos)と呼ばれる貴族の私邸や宮殿などを構成単位とした町として描かれており、またグレゴリオスが見た天上のイェルサレムもオイコスを基本的な構成単位としている。また、天上のイェルサレムには名だたる過去の聖人たちと並んで聖人バシレイオスの邸宅も存在する。すなわち、地上での聖人バシレイオスやその信者たちが集まる私邸が、天上のイェルサレムの縮図となっていることが分かるという⁵⁸。カロリーナ・クパネによれば『聖愚者アンドレアス伝』や『ニフォン伝』など他の10世紀の終末論的言説を伴う文学において描かれる幻視の中の天上のイェルサレムは基本的に聖書の伝統に従った描写がなされているという。それに比べて、特にコンスタンティノーブルの表象が反映されているのは『修道士コスマス伝』と『新バシレイオス伝』であり、その程度がより顕著なのは後者の方である⁵⁹。すなわち、最後の審判が到来することが期待された10世紀ビザンツにおいて、多くの聖人伝や黙示録文学が作られたという歴史的文脈の中に『新バシレイオス伝』も位置づけられるが、『新バシレイオス伝』は同時代の他の幻視譚と比べると、伝統的描写に忠実であるよりも「新しいイェルサレム」としてコンスタンティノーブルを天国の似姿であるかのように詳細に描き出し、賛美することが中心となっており、その点でも同時代の幻視譚を含んだ聖人伝というトposから逸脱していると言える。

4.2. 「語り手」グレゴリオスの描写

次に、聖人伝の「語り手」であるグレゴリオスのトposからの逸脱について考察する。プラッチによれば、トposから逸脱した中期ビザンツ聖人伝の特徴は、聖人の前半生について著者が知らないため聖人が冒頭ですでに高齢に達しているか年齢不詳であること、聖人だけではなく弟子などの第二・第三の中心人物が登場することなどが挙げられるという⁶⁰。10世紀の場合、これに幻視の描写の存在も加わるだろう。幻視については、四章一節で述べたように10世紀における終末論の流行が関係しており、幻視を含んだ類似の具体例は上述した通りである。また、聖人と著者がある目的に合うよう創作される現象が初期ビザンツから確認されるが、中期ビザンツでは『サルディスのエピファニオス伝』、『エデッサのテオドロス伝』、『聖愚者アンドレアス伝』、『ニフォン伝』などがそれに当てはまる⁶¹。『新バシレイオス伝』もモデルとなった人物の存在や描写の詳細さから、完全な創作ではないと思われるが、この事例に含まれる。しかし、グレゴリオスが他の語り手と異なるのは、教会・修道院関係者ではなく独身の土地所有者で

あることや、中期ビザンツ聖人伝の著者の中でおそらく唯一の一般教徒であること、聖人の死を目撃しておらず埋葬にも関わりがないこと、長大な物語の三分の二で一人称の語りを展開することなどである。つまり、語り手の性質については従来のトボスだけではなく、同時代のトボスからも外れていることになる。

まずは、語り手グレゴリオスの「独身の一般教徒で、土地所有者」という特殊な性質について見ていく。聖人の弟子が書くにせよ、後世の人間が書くにせよ、聖人伝の著者・語り手は現実でも作中でも一般的に教会か修道院に属していることが圧倒的に多い。第三章で概観したように、イコノクラスム以降の中期ビザンツにおいては特に著者・語り手は修道士であることが顕著であった。にもかかわらず、グレゴリオスはコンスタンティノーブルの郊外にあるライデストスという場所に小さいながら土地を持っている俗人であり、普段はユリアヌスという霊的兄弟と共に暮らしていた⁶²。また、そのような語り手としては特殊な身でありながら、聖人バシレイオスの弟子として霊的父子関係を結ぶ前にも、エピファニオスという宦官の霊的父がいたようであるし⁶³、よく自室で瞑想し⁶⁴、聖人の居る私邸に加えて聖ステファノス教会にも頻繁に出向いている⁶⁵。聖人の死に立ち会えず埋葬にも関わらなかった理由として四旬節の間隔離された場所で祈りを捧げていたからと弁明もしている⁶⁶。さらには死後の世界と最後の審判の幻視を見た上に再臨したキリストに話しかけられるというキリスト教徒としてはこれ以上ないほど名誉な体験をしている⁶⁷。それゆえ、グレゴリオスの敬虔さは一般教徒としては最大限強調されていると言えるだろう。

次に、グレゴリオス自身の体験の描写について述べる。彼は第Ⅴ章を除く各章の冒頭で主題に関する自身の考えを述べてから本筋に入っている。すなわち、第Ⅱ章は女奴隷テオドラの死とその死後の行方に対するグレゴリオスの苦悶で始まる。テオドラがいつも聖人や自分たちに対して子どものように優しく接していたことや、その表情の神聖さ、そして悪魔の誘惑に惑わされず善行を心掛けることの重要性を説いていたことなど、彼女の善性と敬虔さを賞賛している⁶⁸。また、テオドラが死んでしまっていて寂しく、彼女の死後の行方が余りに不安で聖人を訪ねたという描写がなされている⁶⁹。第Ⅲ章はグレゴリオスの聖人との特別な関係を強調する文章で始まる。聖人は今までその美德や知恵を隠した「聖愚者」のようであったにもかかわらず、自分が聖人についての伝記を書くという示唆を受け取ったことへの感動と驚きを吐露している⁷⁰。また、第Ⅳ章の冒頭では、部屋で瞑想しながら、悪魔の誘惑に対する自身の耐性の無さと最後の審判で救われる方法について悩んでいる時に、ユダヤ人の邪悪さに対する疑念が湧いてき

て、信仰の正しさの所在を見失ってしまう⁷¹。そこでバシレイオスの所へ相談しに行こうとした道中で誘惑に負けて競馬場へ立ち寄ってしまったことを語り⁷²、それらが契機となってバシレイオスの力で異界を幻視することになる。第Ⅵ章では幻視から目覚めた時の驚きや恐れ的情感、最後の審判の光景が脳裏を離れないことについて語り、目撃した全ての事柄を聴衆のために書き留めることを決心したと述べている。また、それらを七日間で書いたと主張しているが、七という数字は聖書的であり、その異常な長さからも不可能なように思われる。直後に書いたと述べることで物語の信憑性を高めるという意図が含まれていると考えられるだろう。このようにグレゴリオスは、自身の体験や感情を詳述しながらも、聖人をそこに関連させるようにして「聖人伝」の体裁を保っていると言える。

また、グレゴリオスはその敬虔さにもかかわらず、人々が日常的にするような過ちを犯している。すなわち、上述のように彼は競馬場の見物という誘惑に屈しているし、彼の所有地に住んでいたメリティネという魔女の誘惑に屈しかけて何とか逃れたものの、魔女が原因で重病を患い、よく教会に通っていたおかげで聖人ステファノスに治してもらっている⁷³。また彼の地主の娘の所有物であるベルトを盗んでおり、聖人から叱咤されている⁷⁴。また、自身の敬虔さに加え、このような教訓話をしたり、慈善や告解の重要性を強調したりする理由は、第Ⅱ章で唆されているように、最後の審判における救いのために必要だからだろう。

以上をまとめると、グレゴリオスは俗人の土地所有者で独身という社会的には「逸脱者」と見られかねない特殊な境遇を持ちながらも、聖人と親密な関係を結び、死後の世界や最後の審判の幻視という聖なる体験を果たした「理想の敬虔な一般教徒」として描かれている。また、感情表現や自身の考えを述べたり、競馬場の誘惑に屈したり、物を盗んでしまったりといった罪も告白することは一般教徒の聴衆たちに親近感を持たせる効果を持っていると考えられる。

4.3. 聖人バシレイオスの周縁的描写

次に聖人バシレイオスの描写に見られる逸脱性を分析していく。まずは、聖人バシレイオスが作中で行使した力について確認する。その力とは治癒能力と悪魔・魔術への対抗、予言、透視能力である。またテオドラの死後の関所通過を助けていることから死後の世界への介入、そして第Ⅳ章の冒頭の場面でグレゴリオスに行ったような他人に幻視を見せることも力の一つとして挙げられる。治癒能力や予言は初期キリスト教時代から同時代の聖人伝にかけてよく言及される聖人の力である。ただし、死後の世界への個人的介入と他人に幻視を見せる力

に関しては中期ビザンツの聖人伝の中でも珍しい。この聖人伝の目的の一つは死後の世界やそこで生じる最後の審判を人々に伝えることであるから、死後の世界への介入という力の特殊性は聖人伝の目的に由来するものと考えられる。

次に、伝記における聖人の周縁的な描写について分析していく。聖人伝においては聖人こそが中心的な描写の対象のはずだが、バシレイオスは物語の中で「語り手」グレゴリオスやその他の登場人物の陰に隠れる傾向にある。また、第二章で述べたように、中期ビザンツの聖人の多くは修道士であるが、バシレイオスは教会や修道院から距離を取って一般教徒たちの邸宅に住んでいる。これらのトポスからの逸脱の要因について、モリスが指摘するようにバシレイオスが来歴を語らないことは第二章で述べたような聖人の「異人」としての性質を表していると解釈できる⁷⁵。またバシレイオスが前半生を語らないのは、彼が小アジアからコンスタンティノープルへやって来たことを考慮すれば、同時代の「旅する聖人」たちのトポスを省略した結果のように見える。ただし、彼は首都に移住してきた後、一般教徒たちの私邸に定住しながら活動しているため、これだけが理由とは言えない。ゆえに、聖人が公的なキリスト教機関と距離を置いていることについては当時のビザンツ社会の状況と関係していると考えの方が適切だろう⁷⁶。すなわち、教会人や修道士といった既存のキリスト教権力の墮落である。具体的には、総主教ニコラオス 1 世 ミュスティコスと同僚の教会人がコンスタンティノス・ドゥーカスに対して犯した偽証罪とその残酷さの表現⁷⁷、レオン 6 世の四回目の結婚（いわゆる四婚問題）を承認した総主教テオフィラクトスへの非難⁷⁸などが作中で言及される。また、聖人とは直接の関係は無いが、第 V 章の最後の審判の中で、腐敗した教会人や修道士が裁かれて地獄で苦しむ様子が数多く見られる一方⁷⁹、聖性を秘匿する「聖愚者」が天国に迎えられる様子が対比的に描かれていることも挙げられる⁸⁰。また、最後の審判を眺めていたグレゴリオスが審判の終わりにキリストに呼ばれて助言を受ける場面で、キリストは修道士たちへの忠告や現世での告解の重要性、典礼の際に集中しないことや典礼を中断することへの警告などを説いている⁸¹。さらに、グレゴリオスやバシレイオスの周囲に集う奴隷、宦官、宮廷人たちが美德や敬虔さにおいて賞賛されることを鑑みれば、教会人や修道士に対する暗黙の批判であるという解釈が可能だろう。

以上をまとめると、聖人バシレイオスの教会・修道院からの周縁性は、当時腐敗していると見なされていた教会人や修道士たちに対する暗黙の批判を行うためであると考えられる。

4.4. 歴史的人物・事件の描写

また歴史的イベント・人物が多く登場していることは物語の信憑性を高めるため利用したと考えるのが妥当だが、そこに著者の思想が含まれていることにも注目する必要がある。まずは、第Ⅰ章の冒頭で登場するアラブ人宦官サモナスと將軍コンスタンティノス・ドゥーカスが対比的に描かれている点を確認する。

サモナスは物語冒頭で聖人バシレイオスを拷問する残忍な心の持ち主で、官位をひけらかす傲慢な人物として描かれる。特に激情する姿や獣のような残忍さが強調されており、初期の殉教聖人を痛めつける帝国高官の姿と重なる⁸²。

一方で「反乱者」コンスタンティノス・ドゥーカスは、聖母マリアから賜った炎を出す馬と炎をまとった武器を使ってアラブ人を撃退する敬虔な聖人のように描かれ、そして総主教ニコラオス 1 世ミュスティコスに騙されて反乱に失敗してしまう悲劇の英雄としても描かれている⁸³。聖人バシレイオスはこの反乱の前に反乱の失敗を予言するという形で関わっているが、明らかに後付けである。

また、サモナスとコンスタンティノス・ドゥーカスには因縁があったことが知られている。アラブ人捕虜としてビザンツ領に連行され、宦官として宮廷で仕えていたサモナスがシリアへ亡命しようとした際、当時ストラテegosだったコンスタンティノスがサモナスを国境で逮捕し、元老院で訴えたのである。また、サモナスは宮廷内での皇帝の側近集団と軍事貴族ドゥーカス家との間での対立の際、レオン 6 世の忠臣の一人として振る舞っており、レオン 6 世の四婚問題の際にも皇帝への支持を保ったことからパラコイモメノスに昇進している⁸⁴。

このような両者の対立と因縁をふまえた上で、グレゴリオスはコンスタンティノス・ドゥーカスを好意的に描き、サモナスを聖人の敵役として描いたのだろう。また、コンスタンティノスを騙して反乱者として殺害したニコラオス 1 世ミュスティコスを非難するためでもあるだろう。つまり、サモナスを聖人の拷問役として登場させて悪く描き、聖人の生涯を不自然に遮る形でコンスタンティノス・ドゥーカスの反乱について語っていることは明らかに意図的な編集である。つまり、グレゴリオスは意図的に聖人の首都来訪に関連させて、自分が描きたかったこれら同時代の人物・事件を詳細に語り、それに関する自己の見解を暗に示している。第四章二節で扱った彼の自己表現や三節で扱った聖人の周縁性もふまえると、グレゴリオスの「エゴ」の表出は相当なものである。

4.5. 宦官と奴隸の描写

最後に『新バシレイオス伝』で多く登場する宦官と奴隸について見ていく。ま

ずは宦官からだ、名前の分かる宦官だけでも、聖人を拷問した宮廷人サモナス、グレゴリオスの元霊的父であったエピファニオス、聖人に邸宅を提供したコンスタンティノス・バルバロス、ゴンギュリオス兄弟、聖人の埋葬を取り仕切った宮廷人ヨハネスの六人が存在感を示している。サモナスは上述のように邪悪な印象だが、それ以外の五人は基本的に信仰心を持った善良な人物として描写されている。例えば、エピファニオスは、六歳から八十歳までずっと修道生活を続けた敬虔な人物として描かれている⁸⁵。コンスタンティノスは聖人に「究極の信仰と燃えるような愛を持つ者」⁸⁶であり、ゴンギュリオス兄弟は「聖なる徳の実践者であり真の善良さを愛する者」⁸⁷であると形容されている。ヨハネスは物語終盤で聖人の葬儀と埋葬場所を取り仕切るという重要な役割を担っている。さらに聖人の埋葬後、修道士となって墓前に留まり続けるという苦行の後、聖人と同じカルトフィラクス修道院に埋葬され、天国でも聖人と共に暮らしている⁸⁸。

また、奴隷については従来の聖人伝とは異なり、多くの場面で脇役ではなく中心的役割を持って登場する。その中でも代表的なのは女奴隷テオドラである。彼女は聖人バシレイオスの世話係であり、グレゴリオスらの友人であり、第Ⅱ章の関所物語の主人公である。テオドラは邸宅の庭の小部屋に聖人と共に住み、そこで弟子や友人を迎える。彼女は二人の子どもを育てた後、修道院で生活し、聖人やグレゴリオスと知り合った後に死んでしまう。悲しみに暮れる中、グレゴリオスは彼女の死後の行方を知りたいと聖人に何度も乞うた。聖人の承諾を得た日、いつの間にか異界を幻視していた彼はその中で天国にあるバシレイオスの邸宅で幸せに暮らす彼女と再会し、いかに関所を通過して天国に至ったかについて説明を受ける。まず、生前に二人の天使が記録する善行と罪は、死後の関所の課税台帳にも記録され、尋問官が課税台帳に基づいて無罪・有罪の判断をする。二十一の関所を全て通過することで天国に辿り着けるのだが、テオドラは悪口・誹謗中傷・嘘・怒り・戯れ・酩酊・大食い・盗み・淫乱の九つの関所で弁明が通らなかったか、弁明の余地が無かったかで有罪の判決を受けているが、地上で聖人に仕えた報酬として与えられた特殊な金銭を払い通過できている。また、姦通の関所で、テオドラは姦通者として非難されるが、同伴者の天使がテオドラは女奴隷であるから合法的な教会で挙式しておらず、主人が強いて男と結びつけたに過ぎないと弁解し、それが受け入れられて姦通の関所を通過することに成功している。このように、死後に天国に行くためには、できるだけ罪を犯さないこと、現世で善行を積んで関所通過用の金銭を貯めておくこと、聖職者の前で告解して罪を課税台帳から消すことが必要であると示される⁸⁹。しかし、テオドラは敬

度な人物として描写されるにもかかわらず、二十一の関所の内、九つの関所で有罪となっており、聖人バシレイオスに仕えていたおかげで全関所を通過できている。一介の奴隷が聖人に仕えていたという「善行」によって天国に行けるという描写は、終末意識の高まる 10 世紀の首都において、奴隷だけではなく、一般教徒にも勇気を与え、聖人崇敬の重要性を教化することに役立ったことだろう。またテオドラが一人称で語るグレゴリウスと再会した時の喜びや死の苦しみ、死の間際の恐怖などの鮮明な感情描写も他の聖人伝には類がなく、彼女の「エゴ」の表出はグレゴリウスと同程度に際立っている⁹⁰。

他の奴隷は主に第三章の聖人の事績における六つの場面で登場する。聖人に助けを求めて来た病氣や魔術に苦しむ奴隷たちを聖人が治癒するという内容であり、注目されるのは奴隷の多種多様さと彼らへの好意的な評価である。ソフィア港に住む裕福な店主の奴隷、アルカディア地区に住む店主の奴隷、一般家庭の奴隷、ムザロン女子修道院の修道女が所有する女奴隷、高位の宦官ヨハネスの奴隷、ロマノス 1 世レカペノスの娘たちの奴隷など、コンスタンティノープルの様々な場所に住む奴隷たちが聖人の下にやって来るのである。また、彼らの敬虔さが強調されたり⁹¹、主人が奴隷の病の治癒を泣きながら聖人に懇願したり⁹²、宦官ヨハネスがある女奴隷に大役を任せるほどの信頼を示したり⁹³するなど、奴隷たち自身の美德や主人との信頼関係が描写されている。また、奴隷たちは主人の店か邸宅で働き、さらに奴隷の中での格付けや管財人や寝室係といった職名、奴隷の解放後の処遇、奴隷の結婚を巡る問題にも言及されている。アングリディやロトマンによれば、これらは実際のビザンツ社会で確認されるであり、テオドラが姦通の罪を通過できた理由として教会で結婚式を挙げていないという法的根拠が示されていることも同様である⁹⁴。すなわち、登場する奴隷が家内奴隷であることやその社会的位置づけの詳細な描写は他の聖人伝には無い特徴である。

本章では、『新バシレイオス伝』が他の聖人伝で「周縁者」として描写される傾向にある宦官や奴隷などの一般教徒を物語の中心に置いていることが示された。また、語りの裏にある著者というフィルターに留意すべきだが、語り手も含めた彼ら「個人」の思考や感情に焦点が当たること自体注目に値するといえよう。

5. 聖人伝受容の在り方

第五章では、『新バシレイオス伝』はどのように人々に受容されたのかについて検討する。受容側の認識を明らかにすることで、これまで述べてきたこの聖人伝トポスからの逸脱がどのような効果を受容者に及ぼしたのかが明らかになる。

しかし、この問題を明らかにすることは容易ではない。聖人伝は個々人が読むのではなく、修道院や教会などの人々が集まる場で読み上げられて受容されるからである⁹⁵。また、聖人伝以外の関連する史料が少ないこともあり、ロジェ・シヤルチエが行った読書行為論のような分析を行うことは不可能に近い。ゆえに、第四章まで分析してきたテキストの形式と内容から読み取れる事柄に基づいて著者の意図を分析し、その意図された受容の対象と在り方を推論する。

5-1. 後世の人々による受容

まず、冒頭でも述べたように、これまで分析対象としているモスクワ版は377フォリオというその長大さに特徴がある。ゆえに、第I章から第VI章までをまとめて聴衆が聞くというのは考えにくい。恐らく、部分ごとに分割して読み上げられたのだろう。ただし、グレゴリオスは、読者・聴衆の両方の意味で取れる言葉を四回⁹⁶、聴衆と解釈できる言葉を三回使用している⁹⁷。さらに「どんな人々の耳にも〔その物語を〕受け入れるのは困難」⁹⁸あるいは「これを私は偽造や変更なしで、この文章に書き留めた。そして私は聴衆の共通の利益のためにあなた方に手渡すのだ」⁹⁹と述べていることから、少なくとも聴衆に聞かせること自体は想定している。また、オリジナル版が作成されて2世紀ほどが経った13世紀のスラヴ語で書かれた手稿本では聖人の事績が省略され、死後の関所や最後の審判についての異界探訪譚のみが含まれており、アングレディが類型化した五つの手稿本の型も、モスクワ版に代表される型を除いた四つの型は完全な形ではなくその多くが異界探訪譚以外の部分を省略している。つまり、伝記部分を含んだ手稿本が少なく、異界探訪譚のみの手稿本が多いという事実は、聖人の事績というより「世界終末を不安視するキリスト教徒に死後の世界を教えてくれる」ものとして認識されたことを意味する。つまり、早川美晶が指摘するように、この聖人伝は聖書や教父文書に断片的に含まれる死後の世界に関する文言を集約・発展させた初のテキストであるという点に歴史的意義がある¹⁰⁰。ゆえに少なくとも後世においては部分的に読み上げられる傾向にあり、主に異界探訪譚を通して死後の世界を伝えてくれるテキストとして受容されたとと言えるだろう。

5-2. 当時の人々による受容

それでは、聖人伝が作られた当時はどのように受容されていたのだろうか。まず聖人伝作成におけるパトロンの存在を考慮する必要がある。この聖人伝のパトロンは宮廷人、特に宮廷宦官であったとされる。マグダリーノはコンスタンテ

イノス 7 世の治世からバシレイオス 2 世に罷免されるまで高位宦官として宮廷で絶大な権勢を振るったバシレイオス・レカペノスであると推察している¹⁰¹。一方、校訂・翻訳を出版したタルボットらは、聖人が通い詰める私邸の主人かつ高く評価されているゴンギュリオス兄弟であるという説を唱えている¹⁰²。いずれにせよ、宮廷関係者の宦官である可能性は高いと言えるだろう。

このようなパトロンの存在を考慮すれば、部分ごとに分割して読まれるにせよ、そうではないにせよ、最初に主な伝達対象とされた聴衆層は宮廷人とその従者たちであったと想定できる。なぜなら、今まで見てきたように、この聖人伝には多くの宮廷人や宦官・奴隷が登場し、女奴隷テオドラは第 II 章の主役を飾っている上に、幻視部分を除いて物語の舞台のほとんどが宮廷に仕える宦官コンスタンティノス・バルバロスや宦官であるゴンギュリオス兄弟の私邸である。ビザンツ帝国において、聖人伝作成にあたってのパトロンの存在は、9 世紀頃からよく見られるようになり、10 世紀以降は一般化していた。そのような聖人伝は古代末期のそれと比べると文体が洗練され、より修辭的で、難解な語彙が含まれており、聞き手として知識人や宮廷人が想定されていたとされる¹⁰³。『新バシレイオス伝』の場合は、その語彙や文法の難易度は口語と文語が混ざったレベルで、伝記の部分は口語に寄っていて易しく、幻視部分はその光景の素晴らしさを表現するために文語寄りであり、全体として標準的な水準であると校訂者たちが指摘していることから¹⁰⁴、やはりパトロンとして宮廷人の存在は妥当であり、最初に彼らに向けて読み上げられることが想定されて作られたと言える。それを考慮すれば、主に異界探訪譚のみが受容された後世とは異なり、同時代には宮廷人や宦官、奴隷が数多く登場する伝記部分も含めて受容されたと考えられる。

さらに、宮殿や私邸で読み上げられたならば、宦官や奴隷もそこに居合わせて聞くといった状況が想定され、彼らの歓心を買ったことだろう。また、手稿本の多くは修道院で保存されていたことから、修道士や一般教徒の前でも読み上げられたと考えられる。また、13 世紀以降にコンスタンティノープル以外の場所の修道院で教会スラヴ語、セルビア語、ロシア語などの多くの手稿本が発見されたことを考慮すれば¹⁰⁵、当時の首都社会だけではなく、それ以外の地域社会でも広く受容されたことは明白である。ゆえに、本章の結論としては、宮廷人や宦官がパトロンとして存在する可能性が高いために彼らの前で伝記部分も含めた「聖人伝」として読み上げられたと思われること、修道院においても多くの手稿本が作られ、広く各地の共同体で受容されたこと、そして、後世では「死後の世界」を語るテキストとして位置づけられたことの三つを確認しておきたい。

6. 結論

本稿は、蓄積されてきた個別研究をふまえ、トポスという視座を導入することで、同時代までの聖人伝と比較しながら『新バシレイオス伝』の表現の在り方を跡付けてきたが、ビザンツ文学史の中でどう位置付けられるだろうか。聖人伝トポスからの逸脱を分析して浮かび上がってきたのは、まず同時代の聖人伝にもよく見られる「聖人の前半生の省略」・「幻視の描写」・「語り手の活躍」という特徴である。特に伝記全体に占める後者二つの要素の存在感を考慮すれば、『新バシレイオス伝』はその最たるものと言える。そして独自の特徴として「一般教徒の主人公化」が挙げられる。すなわち、聖人伝全体に登場するグレゴリオスと第Ⅱ章の主人公である女奴隷テオドラは一人称の語りを展開し、さらに第Ⅲ章で中心的に登場する奴隷たち、宮廷の宦官たちは、皆が一般教徒であり、彼らこそが物語の中心的役割を担っている。以上をふまえた結論として、「語り手」グレゴリオスを代表とする一般教徒たちを聖人伝の軸に置くことによって、より幅広い聴衆に「死後の世界」や「最後の審判」についての情報を伝えようとしたと言える。死後の世界を伝えるテキストとして受容されたこと自体は先行研究でも指摘されてきたが、聖人伝の三分の二以上において一人称で語るグレゴリオスやテオドラが「一般教徒」であることの意味や彼らの強調された「エゴ」は、トポスという視座を参考にすることでより明瞭に示された。さらに「死後の世界」の描写でコンスタンティノープルが死後の理想的世界の似姿であることを強調していることや、聖人の事績や歴史的人物・事件といった当時の人々が慣れ親しんだ要素も、このような目的のために利用されたものと言える。以上のことから『新バシレイオス伝』は、終末意識が高まる10世紀ビザンツにおける一般教徒たちの有り様や世界観を内包しているといえよう。それに加えて、聖人伝という親しまれた形式を利用し、一般教徒の視点を中心とした「異界語り」を展開するという特徴をもった作品としてビザンツ文学史の中に位置付けられるだろう¹⁰⁶。

最後に展望を述べる。聖人伝のトポスやその逸脱の検討は、社会・文化史研究に資すると思われる。それは、聖人伝ができるだけ多くの人々に受容されるように作られ、キリスト教的世界観を維持する機能を担い、当時の人々にとっての真実や願望を伝えるものだったと考えられるからである¹⁰⁷。ただし、そこで判明するものの多くは当時の人々の常識や世界観、イメージ、あるいはそれらが受容された社会的背景だろう。このような文脈において、『新バシレイオス伝』は終末意識の高まる10世紀ビザンツ世界における個人の「死への感情」や「死者との交流」、「死後の世界への憧憬」などの死生観を探る材料になると考えられる。

参考文献

一次文献

Sullivan, D. F. and A.-M. Talbot, (2014) *The Life of Saint Basil the Younger: Critical Edition and Annotated Translation of the Moscow Version*, Dumbarton Oaks.

事典・データベース

Kazhdan, A. P. ed. (1991) *The Oxford Dictionary of Byzantium* (3 vol.), Oxford. (ODB 1-3)

Dumbarton Oaks Hagiography Database (DOHD): <https://www.doaks.org/research/byzantine/resources/hagiography/database/dohp.asp> (2023 年 11 月 19 日閲覧)

Halkin, F. ed. (1957) *Bibliotheca hagiographica graeca. Subsidia Hagiographica 8a.* (3 vol.), Brussels: Société des Bollandistes. (BHG)

Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit Online (PmbZ): <https://www.degruyter.com/database/pmbz/html> (2023 年 11 月 19 日閲覧)

二次文献

Angelidi, Ch. (1980) *Ο Βίος του όσίου Βασιλείου του Νέου* (PhD diss.), University of Ioannina.

Angelidi, Ch. (1985) “Δοῦλοι στὴν Κωνσταντινούπολη τὸν 10ο αἰ. Ἡ μαρτυρία τοῦ Βίου τοῦ όσίου Βασιλείου τοῦ Νέου”, *Symmeikta* 6: 33-51.

Baun, J. (2005) *Tales from Another Byzantium*, Cambridge.

Cupane C. (2014) “The Heavenly City: Religious and Secular Visions of the Other World in Byzantine Literature”. In *Dreaming in Byzantium and Beyond*, eds. Christine Angelidi and George T. Calofonos, Routledge, 53-68.

Efthymiadis, S. (2014) “Hagiography from the ‘Dark Age’ to the Age of Symeon Metaphrastes (Eighth-Tenth Centuries)” In *The Ashgate Research Companion to Byzantine Hagiography Volume II: Genres and Contexts*, ed. Stephanos Efthymiadis, Ashgate, 95-141.

Efthymiadis, S. (2011a) “New Developments in Hagiography: The Rediscovery of Byzantine Hagiography” In *Hagiography in Byzantium: Literature, Social History and Cults*, ed. Stephanos Efthymiadis, Routledge, 157-171.

Efthymiadis, S. (2011b) “The Byzantine Hagiography and his Audience in the Ninth and Tenth Centuries” In *Hagiography in Byzantium: Literature, Social History and Cults*, ed. Stephanos Efthymiadis, Routledge, 59-80.

Evangelou, E. G. (2007) *Λόγια και απόκρυφη βουλγαρική γραμματεία στον ύστερο Μεσαίωνα Η περίπτωση του βίου του Βασιλείου του Νέου*, Thessalonike.

Evangelou, E. G. (2009) “The Bulgarian Translation of the Vita of St. Basil the New According to Manuscript 20N in the Monastery of Sinai” *Scripta and E-Scripta* 7: 181-251.

Grégoire, H. and P. Orgels (1954) “L’invasion hongroise dans la Vie de Saint Basile le Jeune”,

Byzantion 24: 147-154.

- Hinterberger, M. (2014) "The Byzantine Hagiography and his Text" In *The Ashgate Research Companion to Byzantine Hagiography Volume II: Genres and Contexts*, ed. Stephanos Efthymiadis, Ashgate, 211-246.
- Ivanov, S. A. (2006) *Holy Fools in Byzantium and Beyond*, trans. Simon Franklin, Oxford.
- Kaldellis, A. (2014) "The Emergence of Literary Fiction in Byzantium and Paradox of Plausibility" In *Greek Storytelling: Fictionality and Narrative in Byzantium*, eds. Panagiotis Roilos, Herrassowitz Verlag, Wiesbaden, 115-129.
- Leidholm, N. (2022) "Parents and Children, Servants and Masters: Slaves, Freedom, and the Family in Byzantium" In *The Routledge Handbook on identity in Byzantium*, eds. Michael E. Stewart, David A. Parnell, and Conor Whately, Routledge, 263-281.
- Magdalino, P. (1999) "'What we heard in the lives of the saints we have seen with our own eyes': The Holy Man as Literary Text in Tenth-Century Constantinople" In *The Cult of Saints in Late Antiquity and the Middle Ages: Essays on the Contribution of Peter Brown*, eds. James Howard-Johnson and Paul A. Hayward, Oxford, 83-112.
- Magdalino, P. (2003) "The Year 1000 in the Byzantium," In *Byzantium in the Year 1000*, ed. Paul Magdalino, Leiden, 233-270.
- Messis, Ch. and S. Papaioannou (2021) "Orality and Textuality (With an Appendix on the Byzantine Conceptions)" In *The Oxford Handbook of Byzantine Literature*, ed. Stratis Papaioannou, Oxford, 241-272.
- Morris, R. (1994) "The Political Saint in Byzantium in the tenth and eleventh Centuries", *Politik und Heiligenverehrung im Hochmittelalter* 42: 385-402.
- Morris, R. (1995) *Monks and laymen in Byzantium, 843-1118*, Cambridge.
- Papaioannou, S. (2021a) "What is Byzantine Literature? An Introduction" In *The Oxford Handbook of Byzantine Literature*, ed. Stratis Papaioannou, Oxford, 1-20.
- Patlagean, E. (1980) "Sainteté et Pouvoir" In *The Byzantine Saint*, ed. Sergei Hackel, St Vladimir's Seminary Press, 88-105.
- Pratsch, T. (2005) *Der hagiographische Topos: Griechische Heiligenviten in mittelbyzantinischer Zeit*, Berlin.
- Rydén, L. (1983) "The Life of St. Basil the Younger and the Date of the Life of St. Andreas Salos", *Harvard Ukrainian Studies* 7: 568-586.
- Rydén, L. (2001) "The Holy Fool" In *The Byzantine Saint*, ed. Sergei Hackel, St Vladimir's Seminary Press Crestwood, 106-113.
- Rydén, L. (2002) "Fiction and Reality in the Hagiographer's Self-Representation" *Travaux et Mémoire* 14: 547-52.
- Rotman, Y. (2009) *Byzantine Slavery and the Mediterranean World*, Cambridge.
- Savage, M. (2019) "Building Heavenly Jerusalem: Thoughts on Imperial and Aristocratic

- Construction in Constantinople in the 9th and 10th Centuries” In *Byzantium in Dialogue with the Mediterranean: History and Heritage*. eds. Daniëlle Slootjes and Mariëtte Verhoeven. Brill, 67-90.
- Talbot, A.-M. (2018) “Some Observations on the Life of St. Basil the Younger” In *Byzantine Hagiography: Texts, Themes and Projects*, eds. Antonio Rigo, Michele Trizio, and Eleftherios Despotakis, Brepols, 313-324.
- Timotin, A. (2003) “L’eschatologie byzantine: historiographie et perspectives recherche”, *Revue des études sud-est européennes* 41: 241-253.
- Timotin, A. (2006) “Byzantine Visionary Accounts of the Other World: A Reconsideration”. In *Byzantine Narrative: Papers in Honour of Roger Scott*, ed. John Burke, Brill, 404-420.
- Timotin, A. (2010) *Visions, prophéties et pouvoir à Byzance: étude sur l’hagiographie méso-byzantine (IX-XI siècles)*, Paris.
- Timotin, A. (2012) “Les conversions des Juifs dans l’Empire byzantin et leur image dans l’hagiographie (IXe-XIe siècles)”. In *Revista istorică NS* 23: 207-219.
- 足立広明 (1989) 「聖人伝」に現れる砂漠の苦行僧：古代末期東地中海世界の社会変容におけるその役割』『史林』72号: 765-807.
- 飯島克彦 (2013) 「カイサレイアのアレタス『ヨハネの黙示録注解』と10世紀ビザンツにおける終末意識について」『聖書学論集』45号: 133-147.
- バトリック・ギアリ著, 杉崎泰一郎訳 (1999) 『死者と生きる中世—ヨーロッパ封建社会における死生観の変容』白水社.
- 戸田聡 (2008) 『キリスト教修道制の成立』創文社.
- 早川美晶 (2018) 「関所—東方正教会における死後の裁き—」『地獄への招待』西山克編, 臨川書店, 59-87.
- エルンスト・ローベルト・クルツィウス著, 南大路振一, 岸本通夫, 中村善也訳 (2022) 『ヨーロッパ文学とラテン中世 [新装版]』みすず書房.

注

* 本稿は The 1st Northeast Normal University-Okayama University Academic Forum of Students for Byzantine Studies (2023 年 9 月 19 日、於 Zoom)で報告した Some Approaches to Byzantine Hagiography: The Life of Saint Basil the Younger の一部を加筆・修正したものである。

* 本稿で使用する略号は以下の通り。

Basil = The Life of Saint Basil the Younger

BHG = Bibliotheca hagiographica graeca

DOHD = Dumbarton Oaks Hagiography Database

ODB = The Oxford Dictionary of Byzantium

PmBZ Online = Prosopographie der mittelbyzantinischen Zeit Online.

* Basil から引用する際は以下のように行う。

Basil, I (章), 1 (節), 1-1 (行) および複数の節にまたがる場合は Basil, I (章), 1-1 (節)

¹ Morris, R. (1994): 364-5. 中期ビザンツ聖人伝の歴史をまとめている研究書・論文としては Patlagean, E. (1980); Morris, R. (1995); Efthymiadis, S. (2011b); Efthymiades, S. (2014) などが挙げられる。また、メタフラシス(Μεταφρασσις)とは「改作」の意味で、近年のビザンツ聖人伝研究で特に注目されている概念である。

² DOHD: <https://www.doaks.org/research/byzantine/resources/hagiography/database/dohp.asp>

³ ピーター・ブラウンやエヴリーヌ・パトラジャンなどの聖人伝研究の先駆者以来、ビザンツ学でも聖人伝研究は一般化し、近年では The Ashgate Research Companion to Byzantine Hagiography (vol. 2) のような研究ガイドブックが出版された。

⁴ 正式名称は「私たちの聖なる父新バシレイオスの生涯と事績、驚くべき物語の一部」である。10 世紀のオリジナルに最も近いとされるモスクワ版の校訂本としては幻視部分を校訂した Veselovskii, A. N. “Razyskaniia v oblasti russkogo dukhnovnogo sticha”, Sbornik Otdeleniia russkogo iazyka i slovesnosti Imperatorskoi Akademii nauk 46 (1889-90): supp. 3-89; 53 (1891-92): 3-174. と、伝記部分を校訂した Vilinskii, S. G. Zhitie sv. Vasiliiia Novogo v russkoi literature, Odessa, 1911-13. がある。これらは入手困難かつ校訂上の誤りがある一方で、これらを参照しつつ刷新した Sullivan, D. F. and A.-M. Talbot, (2014) *The Life of Saint Basil the Younger: Critical Edition and Annotated Translation of the Moscow Version*, Dumbarton Oaks. は近年の研究動向を踏まえた英語対訳付きであり、本稿ではこちらを使用した。本文から引用する際はこの校訂版に付された章・節・行に従う。

⁵ Angelidi, Ch. (1980)

⁶ Grégoire, H. and P. Orgels (1954); Rydén, L. (1983)

⁷ Angelidi, Ch. (1980): ε-η.

⁸ Morris, R. (1994)

⁹ Magdalino, P. (1999)

¹⁰ Ivanov, S. A. (2006)

¹¹ Angelidi, Ch. (1985); Rotman, Y. (2009); Leidholm, N (2022)

¹² Cupane, C. (2014); Savage, M. (2019)

¹³ 早川美晶 (2018)

¹⁴ Timotin, A. (2010)

¹⁵ Baun, J. (2005)

¹⁶ Evangelou, E. G. (2007)

¹⁷ Angelidi, Ch. (1980): 96-111. において他の聖人伝が及ぼした影響と間テキスト性が検討されているが、影響を与えたと考えられるものに絞った限定的な比較と言える。

¹⁸ 「ビザンツ文学」という用語については Papaioannou, S. (2021a) を参照。本稿では深く立ち入らないが、「ビザンツ帝国圏で作られたギリシア語文学」という意味合いで使用する。

¹⁹ 例えば、近年では The Oxford Handbook of Byzantine Literature のようなビザンツ文学研究

をまとめたガイドブックが出ている。

- ²⁰ エルンスト・ローベルト・クルツィウス著、南大路振一ほか訳 (2022): 112-52.
- ²¹ Pratsch, T. (2005): 355-56.
- ²² Rydén, L. (2002): 548-51.
- ²³ Pratsch, T. (2005): 356.
- ²⁴ Pratsch, T. (2005): 408-10.
- ²⁵ 戸田聡 (2008): 72-4. 戸田によれば、古代では聖人や修道士は砂漠や荒野ににいるという観念が根強いが、都市に出入りする聖人の事例は既に 4 世紀に見られるという。ゆえに都市で活動する聖人の在り方は古代末期からビザンツ期にかけて徐々に一般化したと言える。
- ²⁶ Morris, R. (1994): 385-6; Efthymiadis, S. (2011b): 70-71.
- ²⁷ Efthymiadis, S. (2011b): 60-3. エウティミアデスによれば、特に 9-10 世紀の約七十種類ほどの聖人伝が修道士あるいは教会人によって書かれたという。
- ²⁸ Patlagean, E. (1980): 99-105; Morris, R. (1995): 74-81.
- ²⁹ Morris, R. (1995): 57-8.
- ³⁰ 足立広明 (1999): 131-2. 足立によれば、この異人概念は初期キリスト教時代の「砂漠の隠者」にも合致するという。
- ³¹ Morris, R. (1995): 59-61.
- ³² Morris, R. (1995): 103-9.
- ³³ Morris, R. (1995): 90-3.
- ³⁴ 『修道士コスマス伝』は、元々首都の宮廷人だったが、皇帝のもとを離れ、テマ・オブティマコイの修道院の修道院長となったコスマスが病に倒れた際に天上のイェルサレムを見たという話だが、コスマスが首都に住んでいたことと天上のイェルサレムの光景が首都を模していることなどの要素から、間接的ではあるものの事例に組み込んだ(DOHD)。
- ³⁵ サモナス (875-?) はアラブ人の宦官としてレオン 6 世に寵愛された。作中では 896 年時点でバラコイモメノスの官位を帯びているが、実際にその官位を帯びるのは 906 年であることから誤っている (ODB 3: 1835-6)。
- ³⁶ ロmanos・サロニテスは、ロmanos 1 世の嫡である。マギストロス(μάγιστρος)の官位を持っていた。作中ではロmanos 1 世に対する反乱者として描写されるが、スキュリツェス年代記によれば、945 年時点でも生存していることが確認される上に、ロmanos 2 世の治世(959-963 年)には皇帝から反乱の疑いをかけられるのを恐れて修道院入りしていることから事実と異なる (PmBZ Online)。
- ³⁷ コンスタンティノス・ドゥーカス (?-913) はレオン 6 世に反乱を起こした父アンドロニコスと共にアラブ領へ亡命し、再びビザンツ帝国へ戻った後にストラテゴス(στρατηγός)、次いでドメスティコス・トーン・スコローン(δομέστικος τὸν σχολῶν)に昇格し、アラブ人相手に善戦して名声を上げた人物である。しかし、913 年の皇帝アレクサンドロスの死後の混乱やブルガールの侵攻に対応するようにと総主教ニコラオス 1 世ミュスティコスによって首都に召喚された際に戦闘になって殺されてしまう。このドゥーカス父子は後に英雄叙事詩『ディゲニス・アクリティス』のモデルになったという説がある (ODB 1: 657)。

-
- ³⁸ コンスタンティノス・バルバロスは、宦官が持つ傾向にあるプリミケリオスの官位を帯びており(ODB 3: 1719-20)、宦官ゴンギュリオス兄弟の縁者で、サモナスの死後にはパロイモメノスの官位を引き継いでいる(Rydén, L. (1983): 573-4.)。
- ³⁹ 早川美晶 (2018): 59-87.
- ⁴⁰ ゴンギュリオス兄弟とは、パフラゴニア出身のアタナシオス・ゴンギュリオスとコンスタンティノス・ゴンギュリオスの二人の宦官のことである。総主教ニコラオス 1 世ミュスティコスが失脚した後、幼いコンスタンティノス 7 世の摂政を務めたゾエに宮廷で重用され、ロマノス 1 世の治世でも宮廷の要職を占めていた。さらにコンスタンティノスの方は失敗したものの、949 年のクレタ島遠征の指揮をしたことで知られる(PmBZ Online)。
- ⁴¹ Leidholm, N. (2022): 266-9. ビザンツ社会において親が子に負う義務は洗礼・結婚・財産相続の手続きであった。レイトホムは主人が奴隷に負う義務がこれと類似していることに注目し、家族関係における奴隷の社会的役割を研究している。
- ⁴² Angelidi, Ch. (1980): 1-17. アンゲリディによって、全ての手稿本の解説が簡潔にまとめられている。35 本の内、22 本がビザンツ期から 19 世紀まで文語的表現で書かれたもので、13 本は 17 世紀以降に民衆語で翻訳されたものである。
- ⁴³ Evangelou, E. G. (2009) において古代教会スラヴ語版の校訂と解説がなされている。
- ⁴⁴ Rydén, L. (1983): 568-86.
- ⁴⁵ Grégoire, H. and P. Orgels (1954): 147-54.
- ⁴⁶ Grégoire, H. and P. Orgels (1954): 147; Angelidi, Ch. (1980): 89-95; Rydén, L. (1983): 577; Timotin, A. (2010): 325.
- ⁴⁷ Rydén, L. (1995) において校訂・翻訳・解説がなされている。
- ⁴⁸ Rydén, L. (2001): 106-13; Ivanov, S. A. (2006): 139-68. 「聖愚者(σῆλός)」とは神のために愚行を演じ、自らの徳や力を秘匿し、聖性を得た聖人である。ライデンによれば、これは『コリントの信徒への手紙』の 4 章 10 節「わたしたちはキリストのために愚か者になっているが、あなたがたはキリストを信じて賢い者となっています」(新共同訳)の独自解釈とされる。σῆλός の語源は μωρός のシリア語訳という説がある。『エメサのシメオン伝』に代表される 5 世紀に隆盛した聖人のあり方で、その後衰退したが 9-10 世紀に『コリントのパウロ伝』や『聖愚者アンドレアス伝』のような同質の聖人伝が再び出現した。
- ⁴⁹ Ivanov, S. A. (2006): 174-94.
- ⁵⁰ Magdalino, P. (1999): 96-8.
- ⁵¹ Talbot, A.-M. (2018): 314.
- ⁵² Magdalino, P. (1999): 83-5; バトリック・ギアリ著、杉崎泰一郎訳 (1999): 19-20.
- ⁵³ Magdalino, P. (2003): 242-45, 254-63; 飯島克彦 (2013): 133-147. マグダリーノによれば、世界創造暦で 6500 年が世界終末だと認識された主な要因は、千年王国のアウグスティヌスの解釈を定式化したカイサレリアのアンドレアスの注解書が 7 世紀以降、広く受け入れられたからだという。さらに、東方への帝国領の拡大、首都の聖遺物の増加などが起こったことも終末論を裏付ける要因となったと述べる。また飯島によれば、10 世紀にはアンドレアスの注解書を敷衍して新しく作られたアレタスの『ヨハネの黙示録注解』の需要が高ま

り、その背景には同時代の終末意識の普及が関わると示唆される。

⁵⁴ Timotin, A. (2003): 241-53.

⁵⁵ Timotin, A. (2006): 418-20. ティモティンによれば、『ニフォン伝』は最後の審判の描写において、それに伴う恐怖よりも救いを強調しているという。これは、聖人ニフォンのために祈った人々は審判の日に救われるという著者の主張を裏付けるためとされる。

⁵⁶ Timotin, A. (2010): 321-41; Timotin, A. (2012): 207-19. ティモティンによれば、『新バシレイオス伝』に加えて、『ニフォン伝』や『聖愚者アンドレアス伝』でもユダヤ人が最後の審判で厳しく裁かれる描写が見られる。『グレゲンティオス伝』でもユダヤ人の改宗が描かれる。またニフォンは作中で4世紀に存在したとされているが、言語的特徴や描かれる場所の多くは異なる年代を示し、965年と1037年の間に作られたとされる。

⁵⁷ Basil, V, 30, 35, 38, 100-109.

⁵⁸ Magdalino, P. (1999): 97-98.

⁵⁹ Cupane, C. (2014): 58-63.

⁶⁰ Pratsch, T. (2005): 408-410.

⁶¹ Rydén, L. (2002): 547-551; Hinterberger, M. (2014): 212-14.

⁶² Basil, I, 34.

⁶³ Basil, I, 32, 1-8.

⁶⁴ Basil, IV, 1, 1-2. IV, 7, 1-2.

⁶⁵ Basil, I, 34, 23. 49, 6. 54, 57, 2.

⁶⁶ Basil, VI, 17.

⁶⁷ Basil, V, 140-143.

⁶⁸ Basil, II, 1, 1-18.

⁶⁹ Basil, II, 2, 1-5.

⁷⁰ Basil, III, 1, 1-5.

⁷¹ Basil, IV, 1-2.

⁷² Basil, IV, 3, 1-22

⁷³ Basil, I, 49-57.

⁷⁴ Basil, I, 49-50.

⁷⁵ Morris, R. (1995): 59.

⁷⁶ Magdalino, P. (1999): 94.

⁷⁷ Basil, I, 18, 27-49.

⁷⁸ Basil, III, 21, 5-10.

⁷⁹ Basil, V, 69-75.

⁸⁰ Basil, V, 37, 10-28.

⁸¹ Basil, VI, 140-143.

⁸² 怒りの表現に関しては「サモナスは怒って (I, 5, 30)」「その怒りを抑えることができず (I, 6, 13)」「彼は激情し (I, 7, 11)」などがあり、サモナス自身を形容する表現については「無慈悲な男は (I, 5, 33)」「残忍な獣は (I, 5, 38)」「邪悪で卑劣なサモナスは怒りながら (I, 7,

3-4)「邪悪な暴君 (I, 7, 16)」「彼は残酷に冷酷に立ち去った (I, 7, 18)」「邪悪で卑劣な男は(I, 7, 23)」「残忍な獣サモナスは (I, 9, 1)」などがある。また「悪魔が完全に彼の心を制してしまった (I, 9, 4)」という様に悪魔に操られ、獣のような残忍さを帯びている。

⁸³ 「...ドゥーカス自身もたびたび人々にこの恩恵について語った。私の若い頃、眠っている時に、見よ！そこには紫色に包まれた最も栄光ある女性〔＝聖母マリア〕と、彼女と同時に燃える馬と燃え上がる炎を出す戦車が現れたのだ。そして彼女は私に言った。「起き上がり、その馬に乗りなさい」と。私は乗った。そして再び「これらの戦車で武装しなさい」と。私は武装した。そして彼女は私に言った。「私の子の敵、主を冒涇する者どもは貴方の顔によって逃げ散るでしょう」と。そしてすぐに彼女は消え去った...(I, 14, 25-31)」

⁸⁴ ODB 3:1835-6.

⁸⁵ Basil, I, 32, 1-17.

⁸⁶ Basil, I, 26, 1-3.

⁸⁷ Basil, III, 11, 6-8.

⁸⁸ Basil, VI, 20-23.

⁸⁹ 早川美晶 (2018): 61-67. 早川が二十一の関所の名称・他に精査される罪・有罪/無罪・弁明の有無・支払いの有無について整理された表を提供している。

⁹⁰ Basil, II, 5-8.

⁹¹ Basil, III, 2-3.

⁹² Basil, III, 5.

⁹³ Basil, III, 36.

⁹⁴ Angelidi, Ch. (1985): 43-51; Rotman, Y. (2009): 141-3.

⁹⁵ Messis, Ch. and S. Papaioannou (2021): 242-243.

⁹⁶ Basil, II, 58, 12. III, 42, 8. IV, 22, 5. VI, 2, 7. VI, 5, 18-19.

⁹⁷ Basil, IV, 22, 5. IV, 22, 14. VI, 18, 25. これらの中で、IV, 22, 14のみ ἀκροατὰς「聴衆」ではなく ἐκκλησιανόντων「会衆」だが、これも聖人伝を聞きに集まる人々と解釈できる。

⁹⁸ Basil, IV, 22, 7.

⁹⁹ Basil, IV, 22, 11-14.

¹⁰⁰ 早川美晶 (2018): 68-9.

¹⁰¹ Magdalino, P. (1999): 108-111.

¹⁰² Basil, Introduction, 11.

¹⁰³ Efthymiadis, S. (2011a): 65-71.

¹⁰⁴ Basil, Introduction, 25-27.

¹⁰⁵ Angellidi, Ch. (1980): στ-ζ.

¹⁰⁶ 9世紀のフィラレトス、10世紀の女性聖人レスボスのトマイスやマリアなど一般教徒が聖人として伝記に描かれる事例は存在するが、彼らはあくまで「聖人」として語られる。

¹⁰⁷ Kaldellis, A. (2014): 118-122. カルデリスは、聖人伝はビザンツ社会において、キリスト教的世界観を維持するのに役立つものであり、たとえ誇張されていても、完全な虚構ではなくある種の真実を含むものと認識されていた可能性を指摘している。

The Original Worldview in the *Life of Saint Basil the Younger*: Byzantium from the Narrative of Other Worlds in the Hagiography

Hideki DOI

Course of World History, Faculty of Literature and Human Sciences,
Osaka City University, 3rd year, BA

This paper aims to clarify the qualities of the *Life of Saint Basil the Younger* created in the 10th century Constantinople in Byzantium, using the usual literary image "topos" as a criterion for analysis. Overviewing the topos of the Greek hagiography from the Early Byzantine period to the Middle Byzantine period, those from the Middle Byzantine period onward show conspicuous deviations from the traditional topos. In particular, the *Life of Saint Basil the Younger* is regarded as a representative example that has deviations from the topos among the hagiographies in the 10th century. In this hagiography, the portrayal of the saint tends to recede into the background. Instead, 'Narrative of Other Worlds' makes up the bulk of the story: The vision of Last Judgement of author Gregory and the passage through the celestial tollhouses after the death of slave Theodora. Based on these characteristics, this paper analyzes the *Life of Saint Basil the Younger* from various aspects, with reference to the hagiographical topos in the 10th century. In conclusion, the author has an original worldview, using the form of hagiography to develop the narratives from the viewpoint of laymen. In addition, the worldview of the afterlife from the laymen in the *Life of Saint Basil the Younger* would have encouraged the acceptance of those narratives by a large audience in Byzantium and beyond.